

*The Turning of
Police Inspector Totsugawa*

● *Kyotaro Nishimura*

パリ発殺人列車

「十津川警部の逆転」

西村京太郎

長編推理小説



光文社文庫

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編推理小説

パリ発殺人列車

著者 にし ひろきょう た ろう 西村京太郎

1993年12月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫

印刷 大日本印刷

製本 大日本製本

発行所 株式会社光文社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(3942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Kyōtarō Nishimura 1993

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71807-8 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

パリ発殺人列車
十津川警部の逆転

西村京太郎

光 文 社

パリ発殺人列車 目次

1	フランスからの招待状	5
2	東京からの脅迫状	41
3	東京の夜に	101
4	寂しい死 さみ	148
5	再びパリ	197
6	逆転への戦い	238
解説	山前 譲 やままえ ゆずる	293

1 フランスからの招待状

1

七月末に、一通の招待状が、警視庁に届けられた。
フランス語と英語で印刷された招待状には、次のように書かれていた。

〈現在の主要国における犯罪の特徴は、大都市型の犯罪の増加と、凶悪化であります。そこで、来る十月十五日より三日間、グルノーブルに、世界主要都市の市警察の代表者が集まっていただき、その現状と対応策を話し合い、合わせて、親睦しんぼくを図りたいと考えました。東京警視庁からも、可能ならば二名の第一線の警察官に来ていただき、この企画に参加していただきたいと思ひます。ご返事をお待ちしております。

尊敬をこめて。

七月二十四日

パリ警視庁

ジャン・ポール・フルー

招待状には、大会の説明書がついていた。

それによると、招待状は、イギリス、アメリカ、ドイツ、カナダ、ソビエト、イタリアなど
の大都市の警察に出されたであった。

グルノーブルの三日間の宿泊費と、パリ―東京間の往復の航空運賃は、パリ警視庁が負担す
る。

また、パリからグルノーブル間には特別列車を走らせるので、その車内で親睦を図ってもら
いたい。シャンパン、サンドイッチなどは、無料で提供される。ただし、TGVを利用される
方は、自由である。

夫人同伴も差し支えないが、夫人の旅費、宿泊費は、本人が負担していただきたい。

参加者の紹介パンフレットを作りたいので、なるべく早く、二名の名前と略歴、それに写真
を送ってもらいたい。

そうすることが、書いてあった。

総監は、すぐ二名を選んで、行かせることにした。最近の犯罪は、国境を越えることが多い。

殺人犯が、簡単に、東南アジアはもとより、アメリカ、ヨーロッパに逃亡してしまう。それを考えると、こうした機会に第一線の刑事を参加させ、各国の刑事たちと顔合わせをしておいたほうがいいと、判断したのである。

人選を頼まれた三上刑事部長は、本多捜査一課長と相談し、捜査一課の十津川と亀井の二人の刑事を選んだ。

二人は、三上に対して礼をいうと同時に、

「できれば、一人は、将来を考えて、若い刑事を行かせてくれませんか」
とも、いった。亀井はさらに、

「私は、語学が苦手ですから、フランスへ行っても、向こうの人とうまく意見を交換できる自信がありません。それなら、フランス語のできる若い刑事を、派遣してください」

「カメさん。通訳をつけてくれるそうだよ。だから、大丈夫さ」

と、本多一課長は笑ってから、部長に向かって、

「どうでしょう？ 十津川君と亀井君のコンビは、自信を持って世界の刑事たちに会わせられますが、若い刑事に、こんなチャンスを経験させてやりたいと思います」

「それはわかるが、二名しか招待されないんだよ」

三上部長が、眉をひそめた。

「ですから、若い刑事は、警視庁の予算で、グルノーブルに行かせてやってくれませんか。こ

れは、警視庁にとつても、損にはならないはずです」

と、本多はすすめた。

「若い刑事一人を、三日間か。どのくらいの費用が要るのかね？」

「五十万から百万の間と思います」

「とにかく、相談してみよう」

と、三上はいった。

誰がどう説得してくれたかわからないが、若い刑事も同行できることになり、その人選が十津川に委まかされた。

十津川は、亀井と相談し、二十代の若い刑事であること、フランス語ができることを最低の条件にして、選考に当たった。

その結果、白井敬しろいたかしという二十八歳の刑事が選ばれた。同じ捜査一課だが、十津川と一度も、一緒に仕事をしたことはない刑事である。

だが、大学時代は、フランス文学をやっていたし、頭の切れることは、自他ともに認めている男だった。

身長も一八五センチはあり、外国の刑事の間に入っても、見劣りはしないだろう。

すぐ、警視庁として、十津川と亀井の二人を正式の代表として、白井敬をその随伴ずいはんということで、パリ警視庁に回答した。

パリ警視庁から、二人分のエール・フランスの切符と、正式な招待状が届けられた。

また、白井刑事が来ることも、差し支えない旨の手紙も届いた。

十月に入ると、グルノーブルでの三日間の大会スケジュールと、出席者たちの名簿が送られてきた。

しかし、日本の場合のような、分単位の詳細なスケジュール表ではなく、ちょっと頼りないような、大ざっぱなものだった。

例えば、第一日目の十月十五日についていえば、次のように書かれていた。

一四時四〇分 パリ（リヨン駅）発特別列車→一九時三〇分 グルノーブル着

特別列車の名称は、「警察の友号」

二〇時三〇分より、市民ホールにて歓迎パーティー

書いてあるのは、それだけだった。どんなパーティーで、誰が挨拶し、何人程度のものかはまったくわからない。

名簿のほうは、写真入りで、出席する刑事の略歴や趣味がのっていて、便利だった。

ロンドン警視庁（スコットランド・ヤード）からも、二名の刑事が出席することになっていて、どんな事件を手がけたかが、箇条書きになっていた。それは、まるで勲章のように、ずらりと並べてあるのだ。

ニューヨーク市警や、ローマ市警の刑事の場合も同じだった。

「JAPON」のページには、十津川と亀井の名前と写真が、ちゃんとのっているのだが、経歴の部分が他の国の刑事に比べて、極端に短かった。

十津川と亀井は、くわしく経歴を書いて送ったし、関係した事件についても、いくつかを列記しておいたのだが、それがまったく記載されていないのである。

最初、空白の多いページに腹を立てたが、考えてみると、無理はないと思った。日本では、連日、新聞、テレビを賑わした幼児連続殺人だったとしても、ヨーロッパでは、ほとんど報道されなかったかもしれないからである。

それに反して、ロンドンの地下鉄の車内で、若い女性が刺殺されたという事件は、多分、パリやニューヨークのマスコミも、大きく取りあげただろう。

おそらく、その違いが名簿に表われているのだと、十津川は思った。

アジアからは、東京警視庁のほかに、マニラ警察からも、二名の刑事が出席することになっていたが、この二人のページも、空白の部分が大きかった。東京とマニラで起きる事件は、同

じように、世界では小さくしか扱われていないのである。政治的な事件は、別にしてだった。十津川たち三人は、十月十四日二一時〇〇分なりた成田発のエール・フランスで、パリに向かった。機内で、なんとなく、気が重くなってきたのは、いやでも、日本の警察の代表という恰好かつこうになつてしまつたからだつた。

「まあ、気楽に行つてきたまえ」

と三上部長はいつたが、その言葉の奥に、日本の警察の恥になるようなことだけはするなという空気が、いっぱいだった。

なにごともなく、三日間を過ごせばいいが、もし、なにかミスでもすれば、待つていたように、日本のマスコミは、書き立てるに違いないのである。

若い白井は、結構、嬉しそうにしていたが、亀井は、律義りちぎな男だから、機内ではなかなか眠れないようだった。

翌十五日の朝、エール・フランス273便は、パリのドゴール空港に着いた。二時間おくれである。

日本なら必ず、迎えに誰かが来てくれるはずだが、ゲートを出て、いくら見廻しても、パリ警視庁の刑事の姿もないし、パトカーの気配もない。

これは、十津川たちが日本の刑事だからというのではなく、今日の一四時四〇分に、特別列車に乗るように知らせてあるから、別に、空港へ迎えに行く必要はないと、割り切っているの

だろう。

とりあえず、十津川たちは、空港内の銀行窓口で、百ドルほど両替をした。とくに小銭を持つていないと、不便だと思ったからである。

「特別列車の出発まで、まだ、十分、時間がありますから、ちらりとパリの市内見物をしませんか」

と、白井がいった。

日本から持ってきたパリの地図を見ると、パリ・リヨン駅は、バスティーユ広場の近く、セーヌにも近い。

パリの市内に入らなければならないのである。

三人は、市内へ行くエール・フランスのリムジンバスに乗った。一人、三十五フランである。バスの座席に腰を下ろすと、やっと、フランスに着いたのだという実感がわいてきた。エール・フランスの乗客の半分近くが日本人だったし、空港の税関で並んだときも、日本人の団体客でいっぱいだった。リムジンバスの中も、どうせ、日本人だらけだろうと思っていたのだが、日本人は、十津川たち三人だけだった。

考えてみると、日本人の団体客は、特別にチャーターしたバスで、さっさと先に行ってしまったらしい。

空港から市内まで、幅の広い直線区間の長い道路が走っている。別に有料道路ではないのだ

が、日本のハイウェイより立派で、バスも高速で飛ばす。

「日本の車が、見当たりませんね」

と、亀井が感心したようにいった。

アメリカでも東南アジアでも、やたらと日本車が走っていたものだが、このフランスでは、まったくといっていいほど、走っていない。アメリカの車も見当たらず、フランスの小さな車が、百キロを越すスピードで走り廻っていた。

三人は、終着の国際センターでバスを降りた。

地図で見ると、市の中心というより、市の西部、ブローニュの森の近くである。

ここがターミナルになっているのは、どうやら、エール・フランス系のホテルが、近くにあるせいだった。

ここから、バスや地下鉄を使つてと思つたのだが、荷物が重い。そこで、フランス語のできる白井に、タクシーを拾わせることにした。

手早く市内見物をし、一四時には、パリ・リヨン駅に着いていること。

それを運転手によく教えて、タクシーに乗った。

運転手は、色の浅黒い、小柄な東洋人で、ベトナム人だということだった。車は中古だが、ありがたいことに大型のシトロエンである。

まず、凱旋門がいせんもんを見て、ロータリーを廻り、シャンゼリゼ大通りを、コンコルド広場に向かっ

た。三人とも、完全にお上り^のさんの感じで、見覚えのある建物が近づくと、肯^{うなず}き合ったりしていた。

予算は、切りつめようということで、昼食は、パンとエビアン（有料の飲料水）を買い、セーヌ河岸の公園のベンチに腰を下ろして、通過する遊覧船を眺めながらすませた。

東京より、一カ月は、寒いだろうと思って来たのだが、十月のパリは、思ったより暖かく、歩くと汗ばむほどだった。

アメリカ人らしい、若い観光客の中には、Tシャツで歩いている者もいた。その一方で、黒いコートの襟^{えり}を立てて歩いているパリジェンヌの姿もあって、なにやら、夏の終わりと冬の初めが、同居している感じだった。いつも、今ごろのパリは、こんな気候なのだろうか。

午後二時には、パリ・リヨン駅に着いた。

ここは、南フランス、スイス、イタリアなどへ行く列車の発着駅で、フランスの新幹線TGVも、ここから出発する。

最初、そちらのホームへ行ってしまったが、駅員に聞き直し、一番端のホームに足を運んだ。五両編成の特別列車が待っていて、ホームでは受付が始まっていた。

十津川たちは、そこで初めて、パリ警視庁の広報担当官に会った。ヨーロッパ人にしてはちよつと小柄で、刑事というより、芸術家といった顔立ちの男である。

名前は、シャルル・J・ポール。四十歳ぐらいと思ったが、実際はもっと若いかもしれない。

「フランスは、日本の刑事を歓迎しますよ」

と、シャルルはいい、握手を交わした。

受付は、若い婦人警官がやっていた。全員、なかなかの美人で、十津川たちが名前をいうと、用意してある名札を胸につけてくれ、紙製のアタッシェケースが渡された。

招待客は、あとからあとから到着して、ホームにあふれてきた。

十津川たちのように、きちんと背広を着ている者もいれば、ブルゾン姿の刑事もいる。揃いのブレザーで来ているのは、この日のために特別に誂えたのだろう。

アメリカからは、ニューヨークとシカゴの二つの警察から、代表が来ていたが、四人とも揃って二メートル近い巨漢で、ニューヨークの刑事は、一人は背広姿だが、もう一人はスニーカーにジーンズ、Tシャツという恰好をしていた。

フランスは、パリ警視庁が主役だが、他の警察署からも刑事が来ているらしく、二、三十人の大所帯を作っている。

十津川たちは、押される恰好で、「警察の友号」と呼ばれる列車に乗り込んだ。

最後尾の5号車に腰を下ろし、荷物を網棚にのせてから、十津川は、渡された紙のアタッシェケースを開けてみた。

グルノーブルの市街図があり、それと、今回の会場となる市民会館の場所やホテルなどが、書き込んであった。